

## 読書通信



No. 208

① 経営は科学だ、「野性」などなんで必要なのか。大抵の人はそう考えるだろう。実際、多くの企業がPDCAにこだわっているが、野中郁次郎ほか『野性の経営』（KADOKAWA、1980年）によれば、この科学的管理手法は人を指示待ちにし、創意工夫しなくなるという著者が主張する経営学は株主価値最大化に代わり、人々がアニマル・スピリットによって互いに共感し感動する「野性的」企業家魂である。本書の最大の魅力は理論と物語が一体となっている点にある。物語とはタイ北端の麻薬地帯

ドイトウンをコーヒー産地として蘇らせたクンチャイという稀有の人物の壮絶な戦いを詳細に描いたドキュメンタリーであり、これこそが「野性の経営」なのだと読み進めれば腑に落ちるはずだ。マンネリ経営から抜け出すに益するところ大の貴重な経営学を学んでみよう。パソコンをにらんで終日、仕事をしている(つもり)のビジネスパーソンには目からウロコの啓示がある。

② アマゾンやユニクロの潜入記は大変な苦勞があったと思うが、今度はずっと大変だったろう。何しろ米国で1年間も、トランプ支持の赤い帽子とTシャツ姿で共和党のポランテアを装って家々を訪れ、トランプ信者の本音を聞き出そうというのだから。横田増生『トランプ信者』潜入一年(小学館、2200円)はそ

のようにして米国の深部をえぐってみせる。歩き回り続けて足を痛めてしまい、議事堂襲撃事件のときには身の危険を感じ防弾チョッキまで着て現場に入り込み、インタビュウを続ける。トランプ信者の多くは、著者がトランプに不利な質問をすると、それはフェイクだと言下に否定し、いっさい疑うことをしない。このようにして米国社会の分断が生じていることがよくわかる。これは過去形の報告ではない。2年後の大統領選では、共和党内はトランプ絶対優勢で、民主党には強力な対抗馬はいないそうだから。

③ 新疆ウイグルではウイグル語が禁止され漢語教育が進められている。日本でも戦後、占領軍は漢字をやめさせようとした。言葉は民族支配と直結している。齋藤孝『なぜ日本語はな

なっていないのか』(草思社、1650円)は日本語の力、魅力、可能性を多面的に説明し、もっと日本語を大事にせよと力説する。英語能力ばかりが重視され、ために日本語の力が低下しつつあることに強い懸念が示される。日本人の思考力、創造力は日本語あつてのことだ、と。

④ 和田秀樹『80歳の壁』(幻冬舎新書、990円)が高齢者によく売れているらしい。食べたものを食べよ、酒もたばこもやめなくていい、健康診断は不要だ、血圧は高くても大丈夫、薬は基本的に飲むな、自分が好きなことをして過ごせ、80過ぎたらガンの心配はするな、等々。高齢者専門の精神科医のご託宣だ、ここは素直に従ってみようか。楽しく過ごして免疫力を高めることが何より大事なからだ。(浅野純次)